

# 『夢占逸旨』における夢の吉凶観

弘前大学人文社会科学部文化創生課程文化資源学コース  
奥山愛理（東アジア思想ゼミ）

## はじめに

中国において夢は、古くから吉凶や未来を予兆するものとして捉えられ、政治や宗教、日常生活に至るまで幅広い領域で重宝されてきた。そのような夢理解は、多くの占夢書の成立を促し、特に明代には夢や占夢に関する書物が数多く編纂されている。その一つである陳士元撰『夢占逸旨』は、内篇十篇と外篇二十篇から構成された夢をめぐる理論的考察と具体的事例の双方を備えた書であり、当時の夢に対する認識や精神のあり方に関する認識を考察する上で重要な資料である。先行研究においては、上野洋子氏は『夢占逸旨』の外篇について、類書的性格と占夢書的性格をあわせ持つ点に注目し、外篇が実在人物の見た夢とその後の出来事を対応させることで、象徴の妥当性を示そうとしていることを指摘している。一方で、内篇については、「夢や占夢について十の視点から説いており、理論的性格が強い」と評価しつつも、内篇を中心とした多角的な検討については今後の課題として残されている。内篇には理論的議論のみならず、外篇と同様に具体的な夢の内容が散見され、それらは占夢理論を支える重要な要素として位置づけられていると考えられる。そこで本稿では、『夢占逸旨』を扱うにあたり、まず内篇に焦点を当て、内篇に記されている夢の内容を分類し、その吉凶判断の特徴や基準について考察することを目的とする。外篇の検討は今後の課題としつつ、内篇を精査することで、『夢占逸旨』における夢理解の理論的枠組みを明らかにすることを本研究の主眼としたい。

## 第一章 夢の事例と分析

本稿では、『夢占逸旨』内篇に見られる夢の具体的事例を分析対象とする。内篇のうち、衆古篇第四をはじめとして聖人篇第六までに、占夢あるいは夢に関する記述まとまって見られ、本文中には合計三十八例の夢の事例が確認できる。これらの事例は、夢を通じて吉凶を判断するという『夢占逸旨』の占夢観を理解する上で重要な資料であると考えられる。しかしながら、本文においては、夢の内容や夢を見た人物について簡略な言及にとどまるものも多く、夢の性格や吉凶判断の根拠が必ずしも明示されていない場合がある。そのため、各事例を個別に検討するにあたっては、『夢占逸旨』本文に付随する陳士元の息子陳堦による自注や、先に挙げた先行研究における解釈を参照しつつ、夢を見た人物、夢の内容、占断の吉凶を整理する必要がある。本章では、まず内篇に見られるすべての夢の事例を列挙し、その上で夢の内容と吉凶の傾向を分類・分析することにより、『夢占逸旨』内篇における占夢の特徴を明らかにしていく。なお、本稿では、夢の内容が明確に示されているものだけにな

く、占夢の文脈において夢として扱われている記述も含めて分析対象とした。

三十八の事例から、『夢占逸旨』内篇に挙げられている夢の内容は、①祖先や始祖が夢者に助言や未来のお告げをする夢②祖先や始祖以外の人物または動物が出てくる夢③夢者自身の夢④月や星、風などの自然が主となる夢⑤眉など身体に関する夢と、夢の内容の詳細が不明のものを除き、五種類に大別することができた。中でも、祖先や始祖、それ以外の人物が夢に現れて助言やお告げをする内容が頻出している。また、吉凶に関しては本文に吉凶の占断を下す記述はほとんど見られなかったが、夢の内容とその後の夢者に起きた出来事を踏まえて吉夢だと判断できる例が凶夢に比べて圧倒的に多かった。事例の出典については、『左伝』が大部を占めていた。先行研究にも挙げた高木氏は、『左伝』に載せられている夢の事例を分析し、夢の中の祖先神は戦争や外交、立君など諸侯国の存立にかかわる問題に関与していると述べ、夢において祖先が重要であることを論じている。『夢占逸旨』内篇にも同様に挙げられた事例の祖先に関する夢の多さと事例の出典に『左伝』が多いことに、中国古代の夢と『左伝』の繋がりも新たに見出せるのではないかと考える。夢の吉凶について、占夢に関して陳は古法篇第八で精神が不安定な状態で見た夢、現実での妄りな考えが現れた夢、凶兆だとわかる夢、完結しなかった夢、内容の半分を忘れた夢を占わない夢だと説明し、これを「五不占」と呼んでいる。また、占夢の原理に精通していない者、占夢の技術に専念しない者、鬼神に通じた心を持たない者、都合の良い解釈で結果を出す者は占夢者を名乗っていても占いは的中しないとした。以上を「五不驗」と呼んでいる。さらに、古法篇第八には「凶人有吉夢、雖吉亦凶、不可幸也、吉人有凶夢、雖凶亦吉、猶可避也、之故夢有五不占、占有五不驗、」という記述も見られ、陳は夢を見た人物によって同じような内容の夢でも吉凶が異なるとし、夢を見たからといってその全てを占い、吉凶を出すことはしていないということがわかる。これらは、陳が夢および占夢に大きな価値を認めつつも、当時重要な役割を担っていた占夢が恣意的に利用され、虚偽の占断が横行していた状況に対して強い問題意識を抱えていた心情が表れている。類書や夢書のような性格を持ちながらも即断はしていない『夢占逸旨』外篇に見られる特色と同等に、内篇にも占夢には複数の解釈が存在する可能性を想定し慎重に行わなければならないという思想が見られる。本文で三十八個の事例一つ一つに吉凶の占断を下さず人物と内容のみを挙げているのは夢書のような外篇に対し、夢の理論を説明する内篇独自の特色でもあり、陳の占夢に対する慎重な姿勢の表れも特色の一つであると考えられる。

## 第二章 感變篇第十に見る夢の生成論

感變篇第十は、感變の九つの端緒（気盛、気虚、邪寓、体滞、情溢、直協、比象、反極、厲妖）について述べられている。これらには、医学の用語や概念に関連した用語が含まれている。一般的にいわれている意味と感變篇第十で陳士元が占夢に関連付けさせるために定義づけ、説明した意味とは多少の違いが生じているため、一般的な意味と両者の違い、さらには『夢占逸旨』での用いられ方を分析する。

気盛を陳は「五臓における気が余りあることで見る夢」とし、『夢占逸旨』での気盛は、医学的な診断を目的とするものではなく、気の偏在を夢の内容によって説明するための概念であり、医学理論を占夢に応用した表現であるといえる。気虚は「五臓における気が不足することで見る夢」としている。『夢占逸旨』における気虚は必ずしも現実の疾病としての気虚を意味するものではない。邪寓は「邪気が五臓や他の器官に侵犯することで見る夢」とし、『夢占逸旨』では邪気が臓腑に侵入するという医学的な発想に基づく用語を夢の分類概念として体系化されている。体滞は「身体に対する外的刺激が反映されることで見る夢」としている。医学的な用語ではなく、身体に加わった外的刺激が夢に反映される現象を説明する概念である。『夢占逸旨』においては、寝姿や圧迫、寒熱などの身体的条件が、そのまま夢の内容として現れる場合を指している。情溢は「過度な感情の高まりから見る夢」とし、『夢占逸旨』では喜怒哀楽といった情志が過剰になることで、対応する夢を見るとされている。ここでは、夢が単なる身体反応ではなく、内面的な感情の反映であることが強調されており、精神活動と夢との関係を説明している。直協は「夢で見たものと覚醒後に見るものが一致すること」とし、『夢占逸旨』では夢が象徴や比喩を介さず、直接的に現実と結びつく例として位置づけられているのではないだろうか。比象は「象徴的な夢」とし、『夢占逸旨』では夢に現れる事物が、現実の出来事や状態を比喩的に示すものとして解釈される。『夢篇逸旨』外篇にも事例がみられることから、占夢においても典型的な理解方法であると考えられる。反極は「夢に見たことと反対のことが起こること」とし、『夢占逸旨』では夢と現実が単純に対応するのではなく、反転した形で意味を持つ場合があるとされている。厲妖は「悪鬼がとりつくことで見る夢」とし、『夢占逸旨』では理解不能な悪夢や恐怖を伴う夢を超自然的存在の作用として説明している。

分析の結果、九つの概念はやはり陳士元が占夢と結びつけ説明するために一般的に用いられる意味を踏まえながら新たに意味を定義していることが確認できた。しかし、『夢占逸旨』における夢の分類は、必ずしも医学理論に対応したものばかりではないことが考えられる。身体感覚や個人の感情、さらには宗教的観念までも取り込みながら構成されており、単一の医学理論に還元できない多層的な夢理解を示している。

## おわりに

本稿では、明代に成立した夢書『夢占逸旨』のうち、内篇に焦点を当て、その内容と特徴、吉凶観について考察を行った。従来、内篇は理論的性格が強いとされてきたが、実際には具体的な夢の内容が多数挙げられており、それらは占夢理論を支える重要な役割を果たしていることが明らかとなった。

内篇に見られる夢の記述を分類して検討した結果、夢は単なる虚妄ではなく、魂魄や気の働き、天象の変化と深く結びついた現象として捉えられていることが確認できた。吉凶判断においては、夢の内容そのものだけでなく、夢を見る主体の状態や占断の条件が重視されている点に、『夢占逸旨』独自の特徴が認められる。『夢占逸旨』内篇は、単に理

論的説明を行う部分ではなく、占夢に先立つ夢理解の前提や吉凶判断の枠組みを提示する部分であることが明らかとなった。内篇では、具体的な夢の事例を挙げつつも安易な占断を避け、夢を見る主体の状態や占夢の条件を重視する姿勢が一貫して示されている。また、感變篇第十に見られるように、医学的概念、身体、感情、宗教的観念を取り込みながら夢の生成を説明しており、多角的な夢理解が構築されていることがわかった。

こうした内篇の性格を踏まえることで、『夢占逸旨』は事例集としての性格を持つ外篇のみならず、内篇は占夢を慎重に位置づけ直そうとする思想的試みとして重要視されるべきであることを示した。今後は、外篇との比較や他の夢書との対照を通じて、明代における夢理解の全体像をより明確にすることが課題である。

### 参考引用文献

- ・今場正美「中国古代の占夢(四)」(『白川静記念東洋文化研究所紀要』第9号、二〇一四年七月)
- ・上野洋子「『夢占逸旨』外篇について」(『待兼山論業』第三十八号哲学篇、大阪大学大学院文学研究科、二〇〇四年十二月)
- ・大平桂一「中国人の夢：古代から現代まで」(田中淡編『中国技術史の研究』京都大学人文科学研究所、同朋舎、一九九八年)
- ・大平桂一「『夢占玄解』の成立：雲なす證言」(中国文学報卷八十二冊、二〇一二年四月)
- ・大平桂一「中国人の夢：孔子から明末まで」(特集「中国文化の深層」中江彬教授退職記念号、二〇一〇年六月)
- ・清水洋子「陳士元の夢の思想—「真人不夢」をめぐる—」(『東方宗教』第百五号、日本道教学会、二〇〇五年五月)
- ・清水洋子「『夢占逸旨』の占夢理論について—『周礼』の占夢法との関係から」(『中国語中国文化』第五号、日本大学大学院文学研究科中国学専攻、日本大学文理学部中国語中国文化学科、二〇〇八年三月)
- ・清水洋子「夢書の受容に関する考察—『夢占逸旨』を例として」(『中国研究集刊』称号(第六十号)、大阪大学中国学会、二〇一五年六月)
- ・清水洋子「『夢占逸旨』版本の系譜と訂正意図について—内篇異同箇所からの考察から」(『福山大学人間文化学部紀要』第十七卷、二〇一七年三月)
- ・高木智見「夢にみる春秋時代の祖先神—祖先観念の研究(二)—」(名古屋大学東洋史研究報告卷十四、名古屋大学東洋史研究会、一九八九年十二月)
- ・吉川忠夫『中国古代史の夢と死』(平凡社、一九八五年)
- ・『辞海』下(上海辞書出版社、一九七九年版、弘前大学附属図書館所蔵 823/J51/3)